

## 江古田小校長室便り 「温故創新」

H29 (2017)・1127 NO48

校長 伊波喜一

遠き空 かすかな望み 見えねども 人と人との 心通わせ

内閣府が進めている事業に「国際交流事業」があり、参加する青年を募集しています。この事業は1959年から続いており、毎年267名を計15カ国へ送り出しています。これまでに1万数千人を超える若者たちを海外に送り出し、同様に海外からも受け入れています。この事業を進めている「青少年国際交流推進センター」のOさんは、「若い時に国際交流の機会を経験し、多様な文化や諸外国の人にふれることが、相互理解の第一歩となる」と話していました。その派遣先に、大国の援助を受けている国があります。その国には、まだ地雷が埋まっています。その地雷を安全に除去するために、日本は金属探知機の改良を進めてきました。加えて、除去の仕方を現地人に手取り足取り教え、地雷による被害を無くしていきました。その国の人が曰く。「日本人は親切で、最後まで丁寧に教えてくれる」。公平に接して貰えたから、彼は日本に好意を持ち続けました。彼の心に植わった信頼の種は、やがて花開くことでしょう。国際交流は、国際貢献への第一歩であると思います。